

# 五山文化における牡丹鑑賞と景徐周麟の牡丹詩

武 穎

## はじめに

牡丹は中国において、唐代までは鑑賞用の花として認知されず、薬草としてのみ記録されていた。唐代以降、御苑および禁中において鑑賞がはじまり、詩の題材として詠まれはじめた。その鑑賞の風潮はさらに民間に広まり、王者の花として仰がれ、「国色天香」のイメージが附せられた。宋代になると、歐陽修をはじめとした当時の文人らの牡丹愛好により、詩文において詳しく品種などが記載されるとともに、その文学的含意もさらなる展開を遂げた。

日本においても、この風潮が流入し、平安時代から牡丹の栽培、鑑賞が始まった。鎌倉時代以降、唐物類、絵画が公家、武家に収蔵されるようになると、その中でも、牡丹が描かれた御物、絵画が流行し、五山禅林にも影響を及ぼした。五山僧の詩偈集『翰林五鳳集』<sup>1</sup>には、牡丹関連の題材の作品も多くみられ、当時の禅僧らが牡丹を鑑賞し、牡丹を禅院に移植していたことがわかる。特に、五山文学後期においては、前期よりさらに牡丹を取り上げる傾向がある。その中で、五山後期を代表する禅僧景徐周麟の牡丹詩は、数量上圧倒的多数を占めるのみならず、独自の牡丹への表現を有している。本稿は、五山における牡丹文化の受容を記述した上で、景徐周麟における牡丹詩の特徴を明らかにしたい。

## 1. 中国における牡丹文化と牡丹詩

唐代における牡丹鑑賞のはじまりは、高宗およびその後であった武后からであったようである。中唐・柳宗元『龍城録』巻下「高皇帝宴賞牡丹」条には「高皇帝御群臣、賦宴賞雙頭牡丹詩、惟上官昭容一聯爲絶麗。所謂勢如聯璧友、心若臭蘭人者……（高皇帝 群臣を御し、宴賞雙頭牡丹詩を賦せしめ、惟だ上官昭容の一聯 絶麗を爲す。所謂『勢は璧を聯ぬる友の如く、心は蘭を<sup>にほ</sup>はす人の若し』者なり……）」<sup>2</sup>との記載がある。上官昭容とは初唐・上官婉児のことであり、女流詩人にして、当時則天武后に仕えていた。この記載からすると、高宗時代に、既に皇家の園林では牡丹が見られ、開花した珍しい「雙頭牡丹」のために特別に宴会が開催され、鑑賞されたことがわかる。

また、中唐・舒元興は「牡丹賦序」において「人言花者、牡丹未嘗與焉。蓋遁於深山、自幽而芳、不爲貴者所知、花則何遇焉。天后之郷西河也、有衆香精舍、下有牡丹、其花特異。天后嘆之、上苑有闕、因命移植焉。由此京國牡丹、日月浸盛（人の花を言ふ者は、牡丹未だ嘗て與<sup>あづ</sup>からず。蓋し深山に<sup>のが</sup>遁れ、自ら幽にして芳し、貴者の知る所と爲らざれば、花則ち何に遇ふや。天後の

郷は西河、衆香精舎有り、下に牡丹有り、其の花特異なり。天后 之を嘆じて、上苑に闕有り、因りて命じて焉に移植せしむ。此れに由りて京國の牡丹は、日月にやうや浸く盛んなり)」<sup>3</sup>とある。則天武后は高宗永徽6年(655)に皇后となり、さらに上元元年(674)に「天后」に封じられた。その武後の出身地は并州文水(現在の山西省太原市文水県)にあり、黄河流域の「西河」に属する。ここから、牡丹を唐の洛陽の城東にある庭園上苑にもたらしたのは、武后であったことがわかる。

そして、盛唐・李濬『松窓雜録』において「開元中、禁中初重木芍藥、即今牡丹也(開元中、禁中初め木芍藥を重んず、即ち今の牡丹なり)」<sup>4</sup>との記載があり、北宋・樂史の『楊太真外伝』でも「先開元中、禁中重木芍藥、即今牡丹也。得數本紅紫淺紅通白者。上因移植於興慶池東、沈香亭前(先に開元中、禁中 木芍藥を重んず、即ち今の牡丹なり。數本の紅紫淺紅通白なる者を得たり。上 因りて興慶池の東、沈香亭の前に移植す)」<sup>5</sup>という記載がある。興慶池や沈香亭は興慶宮にあり、興慶宮は「南内」<sup>6</sup>とも呼ばれ、玄宗が政治と生活を行っていた場所である。五代・王仁裕『開元天寶遺事』巻四にも「禁中沈香之亭」<sup>7</sup>の記載があり、牡丹が最初に禁中で移植され、鑑賞されたのは高宗のあと玄宗時代のこととなるようである。玄宗は楊貴妃と沈香亭で牡丹を鑑賞し、李白はその場で「清平調詞」を作り、牡丹を楊貴妃に比した逸話も『楊太真外伝』で描かれる<sup>8</sup>。また、前掲の柳宗元『龍城録』には、高宗時の逸話のみならず、玄宗が洛陽から宋単父という牡丹職人を驪山に招いて牡丹を栽培させた記事もある<sup>9</sup>。

その後、唐代から宋にかけて「牡丹花之富貴者也(牡丹は花の富貴なるものなり)」という共通認識が形成された。先の舒元興「牡丹賦序」では「今則自禁闈洎官署、外延士庶之家、彌漫如四瀆之流、不知其止息之地。每暮春之月、遨遊之士如狂焉。亦上國繁華一事也(今則ち禁闈より官署に洎び、士庶の家およに外延し、彌漫たること四瀆の流れの如く、其れ止息の地を知らず。暮春の月毎に、遨遊の士 狂ふが如し。亦た上國繁華の一事なり)」<sup>10</sup>と唐末の牡丹愛好の盛況を描いた。このような盛況は宋代も引き続き、牡丹品種の多様化および地域栽培の発展により、洛陽万花会、彭州牡丹会など牡丹の名所では、住民らによる鑑賞会が催されるようになった。

これら牡丹は詩にも多く詠まれた。唐代から宋代初期までの牡丹詩は、その美しさと高貴さを詠じる作品がほとんどであり、いわゆる「国色天香」が主な主題となっていた。中唐・劉禹錫の「賞牡丹」詩「庭前芍藥妖無格、池上芙蕖淨少情、唯有牡丹真國色、花開時節動京城(庭前の芍藥 なまめ 妖かしけれども格無く、池上の芙蕖 淨けれども情少なし。唯だ牡丹のみ眞の國色有り、花開く時節 京城を動かす)」<sup>11</sup>が一例であるが、牡丹は唐において「京城」の花、「国色」と認識され、芍藥のイメージとは完全に区別されていた。さらに、劉禹錫より前の盛唐・李白の「清平調」詩三首は、唐玄宗と楊貴妃が禁中の沈香亭において牡丹鑑賞会を開催した際に命を受けて製作されたものであり、牡丹を美人に喩える点で特筆すべきである。其の一「雲想衣裳花想容、春風拂檻露華濃、若非群玉山頭見、會向瑤臺月下逢(雲には衣裳を想ひ 花には容を想ふ、春風檻を拂ひて露華濃し、若し群玉 山頭あらはに見るるに非ずんば、會かず瑤臺に向かひて月下に逢はん)」<sup>12</sup>は、この世にない美しさを持つ楊貴妃を群玉山の瑤台に住む仙女に比し、牡丹を詠んだ作品である。

北宋・歐陽修は洛陽に赴任した時期に、当地の牡丹の事情について「洛陽牡丹記」を書いた。その本文は花品序第一、花積名第二、風俗記第三と三つの部分に分けられ、文中では「自唐則天已後、洛陽牡丹始盛。然未聞有以名著者、如沈、宋、元、白之流皆善詠花草……亦不云其美

且異也……（唐の則天自り已後、洛陽の牡丹始めて盛んなり、然れども未だ名を以て著す者を聞かず、沈、宋、元、白の流の如きは皆花草をよく詠む……亦た其の美にして且つ異なるを云はず……）」<sup>13</sup>と指摘し、沈詮期、宋之間、元稹、白居易といった唐代の詩人たちが牡丹を詠まず、宋代になって牡丹詩が盛んになったことを言う。宋代では、牡丹は各地で栽培されたが、歐陽修によれば、洛陽の牡丹が最上のものであった。その詩「洛陽牡丹圖」でも、「洛陽地脈花最宜、牡丹尤爲天下奇（洛陽の地脈 花に最も宜しく、牡丹は尤も天下の奇爲り）」<sup>14</sup>と、洛陽の土地が牡丹栽培に適しており、洛陽の牡丹こそが天下でもっとも優れていると主張している。歐陽修の「洛陽牡丹記」の他、宋代には北宋・周師厚の「洛陽花木記」や、北宋・張邦基の「陳州牡丹記」、南宋・陸游の「天彭牡丹譜」など、地域にちなんだ牡丹に関する記が幾篇も書かれており、後世に大きな影響を与えている。宋代には、自然物の観察・記述が本草学から独立し、様々な動植物の変種を記載した「梅譜」「菊譜」などの書物が著されている。この風潮も牡丹が名声を得るのを後押ししたのだろう。

宋代には、牡丹の品位がきめ細かく定められたのも大きな特徴である。「洛陽牡丹記」花積名第二には「姚黃、左花、魏花、以姓著（姚黃、左花、魏花、姓を以て著す）」<sup>15</sup>と牡丹の品種名には栽培人の姓によって命名されるものがあると記した。歐陽修の詩「綠竹堂獨飲」には、「姚黃魏紫開次第、不覺成恨俱零凋（姚黃魏紫開くこと次第にし、覺えず恨みを成す 俱に零凋すを）」<sup>16</sup>との聯があり、「洛陽牡丹記」では、「錢恩公嘗曰、人謂牡丹花王、今姚黃眞可爲王、而魏花乃后也。（錢恩公嘗て曰く、『人は牡丹を花王と謂ふ、今 姚黃 眞に王爲るべし、而して魏花は乃ち后なり』）」<sup>17</sup>とある。この「姚魏」の牡丹がもっとも有名な品種であり、五山文学においてもこの「姚黃魏紫」の語はよく用いられている。

牡丹詩は、このような牡丹品種の細分化および唐代以上に盛んな鑑賞熱の中で、大きな発展を見せた。宋の牡丹詩は、唐より詩人本人の感想が多く詠みこまれ、より多彩になった。また、路成文氏が指摘しているように、宋代の牡丹詩は、首都、中央、中原とのつながりがいよいよ強くなり、天下太平、民生への深い憂慮による牡丹批判、家園思想、貶謫などによる人生への思考、さらに仏教の「空」への覚悟など、豊富なイメージを有している<sup>18</sup>。

## 2. 五山文化における牡丹、牡丹詩の受容

日本における牡丹の栽培や鑑賞が行われたのは、平安時代に遡る。菅原道真（845-903）『菅家文草』巻四には、「法花寺白牡丹」詩が収録され、牡丹が日本文学に現れる最古の例である。ほかに、『枕草子』や『蜻蛉日記』などにも牡丹が見られ、庭園で牡丹が栽培されることを記載する作庭書『山水抄』<sup>19</sup>も挙げられる。

鎌倉時代以降、宋元思想と禅宗の伝来とともに、唐絵や唐物類が公家、武家など上層階級の間に広がり、五山禅林においても、牡丹が寺院で栽培・鑑賞され、当時の禅僧らに愛好された。五山文学の牡丹関連作品を見ると、唐以来の牡丹が百花の王、富貴の花、「国色天香」であるとのイメージが五山僧において共有される一方、宋代に形成された華やかな牡丹鑑賞文化を受容し、自らの多彩な牡丹詩群を形成している。以下にその詳細を記述していこう。

## 2.1 禅僧らの牡丹鑑賞と牡丹詩

中世においては、牡丹は禁中などに栽植され、武家や貴族らによく鑑賞された。このことは、禅僧らによる応製の作でわかる。まず、虎関師煉（1278-1346）が十七歳だった永仁3年（1295）に作った応製の詩「御製牡丹韻」<sup>20</sup>を取り上げる。

一朵爛斑玉砌傍 一朵 爛斑にして玉砌の傍  
風流依舊屬唐王 風流 舊に依りて唐王に屬す  
天公巧施臙脂色 天公 巧に臙脂の色を施して  
不許韓郎染碧粧 韓郎の碧に染むる粧を許さず

転句の「臙脂色」から判断すると、紅牡丹のことを詠じており、唐王は玄宗のことを指すのだろう。結句にある「韓郎」の典故は唐・段成式撰の『酉陽雜俎』卷十九・広動植にある、韓愈おひの姪が牡丹の根に薬剤を施して花卉を染めた話<sup>21</sup>であり、『太平広記』卷五十四・神仙「韓愈外甥」（出『仙伝拾遺』）にも収録されていて、特に宋代の詩詞に多く見られる典故表現である。例えば、北宋・蘇軾が熙寧6年（1073）十月に、杭州知府の陳述古と山の寺院を遊覧した際に作った「和述古冬日牡丹四首」其の四には「更倩韓郎爲染根（更に倩し 韓郎の根を染むるを爲すを）」<sup>22</sup>の句があり、「韓郎染根」の最初の用例である。

虎関師煉は五山前期の作家であるが、むしろ五山後期の方が牡丹詩は多い。特に当時の五山作家の詩作は、花、鳥などの縁語を多用し、日常生活における牡丹鑑賞など生活情趣が窺える作品が多い。また、『翰林五鳳集』において、牡丹詩は、春部、秋部、冬部、雑植生部に集中し、当時の牡丹鑑賞の一端を示している。まず、同じく応製詩を模した作品、希世靈彦（1403-1488）の「擬應制賦狀元紅」（『翰林五鳳集』卷第八）詩を取り上げたい。

養花心與養賢同 花を養ふ心と賢を養ふは同じく  
應製僧詩愧不工 應製の僧詩は工みならざるを愧づ  
咫尺天顔知有喜 咫尺の天顔 喜び有るを知り  
狀元郎對狀元紅 狀元郎は狀元紅に對す

詩題にある「狀元紅」は、北宋・周師厚の「洛陽花木記」に、「狀元紅、千葉深紅花也……其色最美、迴出於衆花之上也（狀元紅、千葉深紅の花なり……其の色最も美しく、衆花の上に迴出するなり）」<sup>23</sup>とあり、科挙の首席合格者である状元の意味を借りて命名されていたのがわかる。狀元紅も宋代の士大夫によく詠まれたが、五山文学では、應制の場合によく詠まれ、上記の詩以外に瑞岩龍惺（1384-1460）「應制狀元紅」（『翰林五鳳集』卷第八）でも「花爲新郎讓狀元（花は新郎と爲り狀元を讓る）」<sup>24</sup>という句がある。

五山の寺院においても、牡丹が植えられ、大いに鑑賞されていた。その証拠の一つとして、「龍興賞牡丹」詩会が挙げられる。文明18年（1486）3月11日、天龍寺の嵯峨・龍興軒（軒主は伯始慶春、天龍寺一七三代住職）において「龍興賞牡丹」詩会が開催された。当詩会は、相国寺友社の詩衆とともに、ほかの諸寺からも詩衆が集まる「社会の詩会」<sup>25</sup>であり、東堂九員、西道八員が参加したほか、「平僧數十員」<sup>26</sup>も参列した、大規模な詩会であった。亀泉集証（1424-1493）が記録した『蔭涼軒日録』文明18年3月7日条には、「來十一日於龍興軒有詩會。攜桂公可出。以龍興賞牡丹爲題。鹿苑院主亦可光降云々。龍興花事見於坡詩第十四惜花詩跋（來たる十一日龍興軒に於いて詩會有り。桂公を攜へて出づるべし。龍興賞牡丹を以て題と爲す。鹿苑院主も

亦た光降すべし云々。龍興の花事は坡詩第十四「惜花詩」跋に見ゆ)<sup>27</sup>と詩会の予告の記載がある。『翰林五鳳集』巻第八には当該詩会の作品を四首収録しており、現存の詩四首は以下の通りである。

ア 寺是龍興地洛涯 始知姚魏在君家 一叢織作千堆錦 除却此花花不花 蘭坡景莖  
(寺は是れ龍興 地は洛涯 始めて姚魏の君家に在るを知る 一叢 織りて作す千堆の錦 此の花を徐却すれば 花は花ならず)

イ 龍興寺裡錦千堆 一咲相逢共舉杯 自是主人今伯始 秋風更約菊花開 景徐周麟  
(龍興寺の裡 錦千堆 一咲相逢ひ 共に杯を舉ぐ 是れ自り主人 今伯始 秋風 更に約す 菊花の開くを)

ウ 半日陪君僧院中 看花一咲倚東風 龍興路自城西過 未必野桃尋小紅 景徐周麟  
(半日 君に陪したがふ僧院中 花の一咲きして東風に倚るを見る 龍興の路は城西自り過ぎり 未だ必ずしも野桃の小紅を尋ねず)

エ 姚紅魏紫亂於霞 到處龍興人自佳 風雨十年移入洛 城西古寺一叢花 龍彦周興  
(姚紅・魏紫 霞より亂れ 到る處龍興 人自ら佳し 風雨十年 洛に移り入り 城西の古寺 一叢の花)

景徐周麟作のウには「又代朝童」との詩題注があり、龍彦周興作のエには、「天龍伯始(慶春)首座之寮」との詩題注がある。『蔭涼軒日録』には、蘇軾の「惜花」詩跋に書かれる龍興花事が詩題として出されているとあった。蘇軾の詩では、龍興は僧房の名称であり、牡丹鑑賞の寺院の名は吉祥寺であった。こちらの「龍興賞牡丹」詩は、当時天龍寺の首座、一七三代住職の伯始慶春の寮である龍興軒のことを指す。天龍寺は、靈龜山天龍資聖禪寺のことで、暦応2年(1339)に創建され、夢窓疎石が開山であり、五山第一に位置付けられる寺院である。現在京都の西側の嵐山に位置し、龍彦周興詩の「城西古寺」、景徐周麟詩の「龍興路自城西過」の句の内容と一致している。また、景徐周麟の「城西尋紅千葉」詩にも、「落日城西」、「牡丹開處是君家」、「一宿龍興古寺花」などの句があり<sup>28</sup>、龍興軒では、牡丹が栽培され、当時禅僧らに鑑賞されていたとわかる。

天龍寺にどんな牡丹が植えられているかということ、アの蘭坡景莖(1417-1501)の転句には「姚魏」とあり、エの龍彦周興の詩の起句に「姚紅魏紫亂於霞」とあり、姚紅、魏紫のような高級な品種の牡丹が移植され、咲き乱れている様子が描かれている。ウの景徐周麟の作の起句にも「龍興寺裡錦千堆」とあるが、「錦千堆」は蘇軾「惜花」<sup>29</sup>の起句「吉祥寺中錦千堆」を念頭において作った句である。吉祥寺は「惜花」詩跋の「錢塘吉祥寺花爲第一(錢塘吉祥寺の花は第一を爲す)」から、現在の杭州市にあった吉祥寺のことを指す。さらに、「今年、諸家園圃花亦極盛、而龍興僧房一叢猶奇(今年、諸家園圃の花亦た極めて盛んなれども、龍興僧房の一叢猶ほ奇なり)」とあり、アの蘭坡景莖詩の転句の「一叢」、エの龍彦周興の詩の結句の「一叢花」の表現は、東坡の跋から借用している。そして、アの蘭坡景臣の句「一叢織作千堆錦」は、「惜花」詩の「一叢花」と「錦千堆」を組み合わせた物である。

他に、蘭坡景莖には、「東坡詠龍興牡丹圖」(『翰林五鳳集』巻第四十一)の作がある。

牡丹開徧滿沙河 牡丹開徧して 沙河に滿つ  
看玉龍興春不多 玉を見る龍興 春多からず  
縱墮熙寧是非海 縦ひ熙寧の是非 海に墮つるとも

有花須作百東坡 花有れば須く百の東坡を作るべし

この詩において、蘭坡は龍興の牡丹を鑑賞しながら、蘇軾が神宗熙寧年間（1068-1077）に北宋・王安石が実行した新法に反対したため、中央を離れ、各地の地方官を転々としたことを詠出している。蘇軾は熙寧四年（1071）に杭州通判に任ぜられ、さらに熙寧四年（1075）密州（現在の山東省諸城市）の州任になり、熙寧九年（1076）に河中府（現在の山西省永濟県蒲州鎮）に転任したが、道中徐州（現在の江蘇省徐州市）への転任を命じられた。熙寧年間における挫折の連続は、蘇軾にとって人生の大きな転換点であった。その後元豊二年（1079）にはその人生最大の危機となった「烏台詩案」が起こった。更に、結句の「百東坡」については、蘇軾の「東坡居士」という別号の由来につながる。蘇軾は元豊三年（1080）に「烏台詩案」により黄州（現在の湖北省黄冈市黄州区）に貶謫され、在任中、黄州の郊外にあった土地を開墾して「東坡」と名づけ、さらに草庵を結び、「東坡雪堂」と名付け、自ら「東坡居士」と号した。仕官の道において一連の打撃を受けた東坡は、黄州で自らの人生の道と真意を見つけたと言える。蘭坡は転句と結句では、蘇軾が、熙寧の一連のもめ事の「是非海」に堕ちたとしても、牡丹を植えた「東坡」をいくらでも作ればよいという発想を示している。

寺院に牡丹が移植されたことについて、ほかに、蘭坡景菑の詩題の中に「桃花坊北有寺與皇居相接（桃花坊の北に寺あり皇居と相接す）」<sup>30</sup>とある中で、詩には、「牡丹院落暮生愁（牡丹の院落 暮れに愁ひを生ず）」や、景徐周麟の作品に、「先維馨<sup>31</sup>大和尚、宴坐之軒、庭前有牡丹一叢（先維馨大和尚は、宴坐の軒、庭前に牡丹一叢有り）」（『翰林葫蘆集』第四卷）<sup>32</sup>などの記述から、当時禅僧らの禅院や寮には牡丹が移植され、鑑賞されたことがわかる。

また、先に述べた龍興軒で牡丹を鑑賞した詩会のほか、禅林においては、よく牡丹宴が開かれた。例えば、横川景三の詩には、「牡丹宴温少年落髮」（『補庵京華後集』）があり、これは光甫成温という少年僧の落髮を祝賀するために開かれた宴会で、その詩には、「姚紅魏紫映藍袍、君最少年名已高、一日春風任花落、牡丹宴過又櫻桃。（姚紅・魏紫 藍袍に映え、君最も少年にして 名已に高し、一日春風 花落つるに任せ、牡丹宴過ぎ又た櫻桃あらん）」とある。前掲の状元紅の牡丹に関する応製もそうであるが、ここでは「姚紅魏紫映藍袍」で、高級な牡丹が少年の藍袍<sup>33</sup>に彩りを添えると、祝賀や将来性を期待する意を表している。

上記の詩では、牡丹のあとに桜桃（ユスラウメ）が咲くとあるように、春に先駆けて牡丹は咲いている。他の牡丹詩の詩題には「正月牡丹」、「賦十三紅牡丹」、「閏正月尋花」、「閏年牡丹」、「五月牡丹」、「十月牡丹」、「十月白牡丹」、「臘月牡丹」など、正月、五月、十月、臘月（十二月）と冬から春遅くまで牡丹が鑑賞されている。他、「冬日牡丹」、「雪内牡丹」、「雪裡牡丹」など冬や雪と結びつけられることもあり、まだ春になる前、冬の雪の中で花開いていた様子もわかる。

そして、禅僧らが個人的に牡丹を移植し、鑑賞する事情が描かれる事情が伝わる詩題には、「雨後移牡丹芽」、「脩牡丹欄」、「移牡丹」、「閏年移牡丹芽」、「畫牡丹」、「研屏牡丹」、「牡丹燈」、「牡丹時栽松」、「見牡丹」、「庭院牡丹」、「潜邸牡丹」、「雨中牡丹」、「造牡丹」、「牡丹卵」、「牡丹生卵」など多くある。これらの詩題から、五山禅僧らの牡丹愛好が見られる。以下、『翰林五鳳集』や別集に収録された数首を取り上げる。

#### ア 閏年牡丹（『翰林五鳳集』卷第八）

群芳易過夢中春 今歳牡丹添幾句 花似耆英傾洛社 十三紅是十三人 月舟寿桂

（群芳過ぐる事易し 夢中の春 今歳の牡丹 幾句を添ふ 花 耆英の似く 洛社を傾け

十三紅は是れ十三人なり)

イ 冬日牡丹(『村庵藁』下)

疑是屏中畫牡丹 開花冬日得相看 沈香亭畔春如夢 流落人間知歲寒 希世靈彦

(疑ふらくは是れ屏中に牡丹を畫く 花を開きて 冬日相看るを得たり 沈香亭畔 春は夢の如く 人間に流れ落ちて 歲寒を知る)

ウ 移牡丹(『翰林五鳳集』卷第八)

黃買姚家紫魏家 此心非是競豪華 輕陰帶得移時雨 養自花開到落花 希世靈彦

(黃は姚家を買ひて 紫は魏家 此れ心 是れ豪華を競ふに非ず 輕き陰 帶び得たり 時を移す雨 養ひて花開く自り花落つるに到る)

エ 脩牡丹欄(『翰林五鳳集』卷第八)

僧舍牡丹紅數株 廢欄添竹巧相扶 春風寄語開元主 防得御花野塵無 琴叔景趣

(僧舎の牡丹 紅きこと數株 廢欄に竹を添へ 巧みに相い扶す 春風語を寄す 開元の主 防ぎ得たり花を御して野塵無きを)

オ 雨中牡丹(『翰林五鳳集』卷第八)

不是添花朝暮聲 牡丹庭園暗傷情 沈香一自風成雨 信道春無三日晴 龍彦周興

(是れ花に添ふ朝暮の聲ならず 牡丹の庭園 暗く情を傷ましむ 沈香一たび風雨を成して自り <sup>まか</sup> 信せて道ふ春に三日の晴れ無しと)

まず、アは、閏年の閏月に咲いた牡丹を「十三紅」という。それは、文明九年に横川景三や景徐周麟らも「賦十三牡丹紅」などと題するように、十三紅が開花した際に、禅林で詩会が開かれたときに、作成された詩だからである。月舟桂壽の詩には、十三の数で「耆英傾洛社」を詠出した。「耆英傾洛社」は、北宋の宰相文彦博が洛陽に滞在した際、老年の士大夫を招いた宴会「洛陽耆英会」のことを指す。北宋・司馬光は「洛陽耆英会序」において、「凡十三人、人爲一詩……(凡そ十三人、人一詩を爲す……)」<sup>34</sup>と書いている。月舟はこの典故を念頭にしながら、牡丹を擬人化し、「十三紅是十三人」と詠出している。また、仁如集堯(1483-1574)が詠じた「正月牡丹」<sup>35</sup>詩には、「少年司馬會耆英(少年司馬 耆英に會す)」の句があり、少年司馬光も耆英会に臨んだことを讚する句である。五山文学には何首もの正月の牡丹を詠じた詩があるが、中国文学では、あまり正月の牡丹が詠まれていない。これは、五山文学ならではの題材として特筆すべきである。

次に、イは冬の牡丹が咲いたことで、玄宗が楊貴妃と沈香亭で牡丹鑑賞をした話を念頭にしつつ、榮華が夢のようであったと指摘し、両者がのちの安史の乱で「歲寒」にあたったことを連想した点が眼目である。桃源瑞仙(1430-1489)の門生らの作品集『古宿新詩』<sup>36</sup>には、文明七年(1475)に「一朵妖・冬日牡丹」を題として競作した詩の一群があり、うち圭之光蘭<sup>37</sup>という僧の詩には「牡丹富貴在開元、寵雨恩風今尚存、只似舊時亡國恨、天公謫墮置寒村(牡丹の富貴 開元に在り、寵雨 恩風 今尚ほ存す、只だ舊時の亡國の恨みの似く、天公 謫墮して寒村に置かる)」とある。この詩も同じ発想で書かれており、今咲いている牡丹が玄宗や貴妃のように「寒村」におちぶれている様を嘆いている。詩題にある「一朵妖」は、蘇軾の「和述古冬日牡丹四首」其の一の句「一朵妖紅翠欲流(一朵の妖紅 翠 流れんと欲す)」<sup>38</sup>に拠ったものである。中国宋代には、もっぱら冬の牡丹を詠む詩が何首かあるが、このような冬の牡丹と玄宗・楊貴妃の零落を結びつけた表現はほとんどなく、五山文学における独自の発想であろう。

他、『古宿新詩』には「讀牡丹榮辱志」、「淺色御袍黃」といった牡丹に関連した詩題がある。うち、詩題にみえる『牡丹榮辱志』は宋・丘濬が撰した牡丹の品種を論じた書である。「御袍黃」は周師厚の「洛陽花木記」によると、千葉黃花の中に分類されている品種名である。当時の禅林においては、これら宋代における牡丹関連の文書や詩文が基本的な教養とされていた。

また、ウの内容は、希世靈彦が自ら牡丹を移植した心情が描かれる。虎関師煉のもう一首の「牡丹」詩には「曉秋移植晩春鮮（曉秋移植すれば 晩春鮮し）」<sup>39</sup>の句があり、また景徐周麟にも「雨後移牡丹芽」詩があり、五山僧は自ら牡丹を自己の禅院に移植していたことが窺える。エの「脩牡丹欄」も作者自身の禅院の牡丹を植えた囲いを修復する光景を吟じながら、玄宗の禁中に移植された牡丹を連想した個性溢れた牡丹詩である。最後に、オであるが、作者は庭園にある牡丹が雨に降られるのを目の前にして、沈香亭の故事を念頭におきつつ、玄宗と貴妃のその後の運命を連想し、自らの詩想を展開している。

以上のように、五山僧による牡丹詩の関連詩題はほとんど宋代に現れたもので、自らの生活情趣を描くものが多く、歴史的連想、特に唐玄宗と楊貴妃や、沈香亭などの連想も宋において詠まれるようになった。五山文学における牡丹という花への認識も、これらの故事や人物と深く結びつき、特に楊貴妃題材との関連を詠出したのは、中国の詩より量が圧倒的に多い。

本節では、五山僧の牡丹鑑賞につながる牡丹詩の特徴について検討してきたが、五山禅林では、牡丹は唐玄宗の開元年間において禁中（特に沈香亭）で栽培・鑑賞され、「国色天香」のイメージがあるのを認識する一方、宋代の欧陽脩の「洛陽牡丹記」をはじめ、『牡丹榮辱志』、「洛陽花木記」に記述された牡丹品種に関する知識、蘇軾など宋代文人によって広く展開されている牡丹詩の様々な題材をしっかりと消化している様相が窺える。さらに、五山僧らは、これらの故事や詩を念頭にしつつ、自らの発想を込めて、独自の発想が見られる五山牡丹詩群を作ったという点で特筆すべきであろう。なお、五山文学における牡丹詩のもう一つの特徴は、牡丹の関連画題を大いに詠んだことと、関連歴史人物を詠出したことにある。こちらも中国における牡丹詩よりも大いに発展させた部分である。

## 2.2 牡丹絵画と牡丹詩

中国では、特に唐代以降、縁起物として、牡丹の意匠が絵画、書道のみならず、陶磁器、金工品、漆器、染織品などに用いられ、牡丹文学の発展の土台ともなっている。日本では、鎌倉時代からこれらの唐物が収蔵され、特に室町将軍家に所蔵される唐物である東山御物の中にも牡丹の意匠があり、牡丹唐草双鶴鏡（室町時代、15世紀、東京国立博物館所蔵）や、紅地牡丹唐草模様金欄（室町時代、15世紀、東京国立博物館所蔵）、獅子牡丹堆朱大香合（室町時代、16世紀、東京国立博物館所蔵）などが挙げられる。特に東山御物には、掛物の表具裂において牡丹唐草文金欄が圧倒的に多い。

1524年前後に成立した能阿弥撰『君台観左右帳記』<sup>40</sup>は、当時の中国からの輸入品として、当時日本にあった宋代院体花鳥画をはじめとする中国芸術品を記録している。矢野環氏<sup>41</sup>は、飯尾永祥撰の辞典『撮壤集』（1454年序文）に記載されている画家326名のうち、193名が『宣和画譜』と重複すると指摘し、さらに、一部の内容から見て、当時禅院から著者である飯尾永祥への絵画などの資料提供が見られるとも指摘している。『宣和画譜』は北宋末の徽宗皇帝が在位時に宮廷秘府に所蔵された古今の絵画名品、画家230余名をジャンル別に分類し、各画家の

略歴とその評価、延べ 6300 点余りに及ぶ作品を記録した書籍である。すなわち、これらの絵画は当時日本に伝来し、武家や禅寺にも所蔵されていた。『宣和画譜』に記録される牡丹図について、一覧を以下の表にまとめた。

表 I 『宣和画譜』に見られる牡丹関連画題

画家名	画題
劉宗	牡丹游魚圖
邊鸞	牡丹圖、牡丹孔雀圖、牡丹白鷗圖
黃荃	山石牡丹圖、牡丹圖、牡丹鶴圖、牡丹鶉鴒圖、牡丹戲猫圖
黃居宝	牡丹猫雀圖 牡丹太湖石圖 牡丹雙鶴圖
滕昌佑	牡丹睡鵝圖、湖石牡丹圖
黃居寀	牡丹圖三、牡丹猫雀二、牡丹鸚鵡圖一、牡丹竹鶴圖六、牡丹錦鷄圖五、牡丹山鷓圖四、牡丹鶉鴒圖八、牡丹黃鶯圖二、牡丹雀鴿圖一、牡丹戲猫圖三、湖石牡丹圖五、牡丹金盆鷓鴣圖二、牡丹太湖石雀圖二
徐熙	牡丹圖十、牡丹鶉鴒圖一、牡丹鳩子圖、寫生牡丹圖、榮牡丹圖、牡丹芍藥圖、牡丹戲猫圖一
徐崇矩	剪牡丹圖四
趙昌	牡丹圖六、牡丹錦雞圖一、牡丹鶉鴒圖一、牡丹猫圖一、牡丹戲猫圖一、寫生牡丹圖一
易元吉	牡丹鶉鴒圖一
崔白	牡丹戲猫圖二、湖石風牡丹圖一
吳元瑜	寫生牡丹圖、

このように、牡丹図は他の物との組み合わせで成立した画題が目立つ。ほかに、能阿弥撰「御物御画目録」<sup>42</sup>には、趙昌の花、花鳥、郭熙の花の関連項目が見られるが、牡丹が含まれるのかは不明である。また、「仏日庵公物目録」にも花鳥が二十四項目記載されるうち、牡丹が含まれるのかは不明であるが、牡丹図がある可能性が高いだろう。

もう一つ参考になるのが、1623 年、江戸時代初期に成立した狩野一溪（1599-1662）による中国画論や画題を簡略にまとめた『後素集』である。『後素集』には、五山僧が詩の題材として取り上げられた物が入っていると指摘される<sup>43</sup>ため、当書に見られる牡丹の画題を以下にまとめる。

表 II 『後素集』に見られる牡丹関連画題

巻数・部門・画題名	内容
巻一・帝王・漢高祖花見圖	高祖洛陽の花を見、高祖率十万兵見花於洛陽張良登高處吹笛
巻二・仙女・牡丹燈圖	府（火州）判か娘に府麗郷と云女死して常に金蓮と云者に牡丹を花の如なる燈爐を持せて鎮？明嶺の喬生とちぎる、魏法師是を弔ふ體也

卷三・美人・貴妃明皇看牡丹圖	玄宗楊貴妃牡丹を看給玄宗貴妃に曲を舞せん爲李白をめす、李白酔て殿上に杏をはきなから參内す、是を官人よりてぬがす貴妃水などを面にそゝく、其時太白清平調の文を書也
卷三・畫公・于競觀牡丹圖	于競かうらんなどによりて牡丹を看體
卷三・鳥獸部・牡丹孔雀圖、牡丹雙雞圖、牡丹睡鴨圖、牡丹鴛鴦圖、牡丹雀猫圖、牡丹睡猫圖	—
卷三・蟲魚・牡丹游魚圖	—
卷三・草木・黃牡丹圖、吹風牡丹圖	—

『宣和画譜』と『後素集』における牡丹図題を比較すると、五山禅林には、宋までの牡丹絵画が収蔵され、鑑賞されていたことがわかる。また、『翰林五鳳集』関連画題詩から見ても、五山僧が鑑賞していたのは、扇面、屏風、印、灯籠、絵画などさまざまな物に描かれた牡丹であり、「牡丹圖」、「紅牡丹圖」、「便面牡丹」、「扇面」、「扇面牡丹」、「扇面墨牡丹」、「便面淡墨牡丹圖」、「扇面牡丹小鳥」、「題便面牡丹睡猫」、「牡丹睡猫扇面」、「扇面牡丹蝶」、「牡丹燈」、「硯屏牡丹」、「牡丹生印」、「便面歐陽司馬牡丹海棠圖」、「明皇貴妃賞牡丹圖」、「東坡詠龍興牡丹圖」など、非常に豊富な詩題が見られ、さまざまな情報が読み取れる。これらの詩を見ると、牡丹と蝶、猫との組み合わせがもっとも多く、しかも歴史人物とともに描かれるものがあるのにも注目すべきである。

中国では、唐代から牡丹の蝶の組み合わせが見られるが、猫との組み合わせは南宋に入ってからのものであり、そのほとんどは絵画である。猫、蝶はそれぞれ長寿を意味する「耄」、「耋」字の発音と似ているので、長寿のシンボルとして牡丹の「富貴」と取り合わせられ、よく絵画に描かれた。『宣和画譜』では北宋・徐熙「牡丹戲猫」が最古の例と推測できる。南宋・大川普済が編集した禅宗の灯史（歴史書）『五灯会元』には「牡丹花下睡猫兒（牡丹の花下 睡りし猫兒）」<sup>44</sup>の語があり、これはのちに禅僧の公案や偈頌にも引用され、五山文学にも見られる題材である。しかし、牡丹と猫、蝶の関連する詩の内容から見ると、牡丹と猫の組み合わせは公案引用のところに見られるのに対して、詩など文学性が強い作品には、むしろ蝶が圧倒的に多く現れている。以下、五山文学における牡丹と蝶のモチーフの関連詩作を取り上げたい。

ア 扇面牡丹蝶（『翰林五鳳集』卷第四十一）

牡丹聞説屬沈香 唐室以前名未彰 可怪莊周化胡蝶 夢魂又得近花王 月舟寿桂  
（牡丹聞説く沈香に屬すと 唐室以前 名未だ彰はれず 怪しむべし 莊周 胡蝶に化すること 夢魂も又た花王に近づくを得たり）

イ 屏風牡丹蝶（『補庵京華後集』）

畫裏於春無兩般 姚紅一朵露初乾 繡屏風底人難識 胡蝶飛邊和夢看 横川景三  
（畫の裏 春に於いて兩般無し 姚紅の一朵 露初めて乾く 繡たる屏風の底 人識り難し 胡蝶 邊を飛びて夢と和して看る）

ウ 畫題（『翰林葫蘆集』第三卷）

洛人富貴錦千端 胡蝶雙飛曉夢殘 老去更無花上眼 牡丹障子避春寒 景徐周麟

(洛人富貴にして 錦千端 胡蝶雙び飛びて 曉夢殘す 老去りて更に花上眼無し 牡丹の障子 春寒を避く)

エ 扇面 牡丹蝶 (『翰林五鳳集』卷第四十一)

姚魏春遲一雨催 枝々嬾萼盡情開 蝶兒不結寒梅夢 潁盡花王亦可哉 龍澤天隱  
(姚魏 春遅く一雨催す 枝々嬾萼 情を盡して開く 蝶兒は結ばず 寒梅の夢 花王を潁盡して亦た可なるかな)

オ 牡丹畫 戴若木言之、作牡丹蝶蟲 (『默雲詩藁』二・草木)

待花見久見花纔 無風無雨滿意開 一夢沈香亭下宴 春魂化蝶又飛來 天隱龍澤  
(花を待ちて見ること久しく 花を見ること纔かなり 風無く雨無く 意に満ちて開く 一たび沈香亭下の宴を夢みれば 春魂 蝶に化して又た飛び來たる)

以上の作を見ると、扇面、屏風、絵画に画かれる牡丹を詠みあげ、「花王」、「姚魏」の受容は五山僧の中では一般常識とされているように見られる。しかも、アの「夢魂」、イの「和夢」、ウの「曉夢」、エの「寒梅夢」、オの「一夢沈香」とも、『莊子』齊物論第二「莊周 夢に胡蝶をみる」の故事を用いた詩語である。莊子は夢の中で胡蝶になり、忘我の境地に至り、「万物斉同」の理を唱えている。五山僧は日常において悟道を要務にし、「天地同根、万物一体」の理念を念頭にしている。景徐周麟も日記においてよく夢を記録し、「夢記」という文を書いたが、それらもこの「莊周夢蝶」の故事に基づいた発想である。牡丹と胡蝶の組み合わせと、「莊周夢蝶」の故事の結合は、中国詩ではあまり見られず、五山文学における牡丹詩の特徴と言える。さらに、オのように、玄宗と楊貴妃の「沈香亭」における牡丹鑑賞の故事を念頭にしつつ、二人の愛情物語があたかも「春夢」のような存在であるとの連想も巧妙であり、五山僧によって多く詠まれている。

## 2.3 牡丹詩に詠み込まれる玄宗・楊貴妃・李白

このように、五山僧は唐宋詩の牡丹のイメージを借用した上で、中国詩ではあまり関連付けられなかった故事や公案までも連想し、個性ある鑑賞態度を示し、中国における牡丹詩の内容や題材を異国の地において大きく発展させたと言えよう。画題や詩句からみると、玄宗、楊貴妃など歴史人物との関連を牡丹詩に入れるのも目立ち、またそこにも独自の発想がみられる。以下、関連詩作を取り上げて分析する。

ア 明皇貴妃賞牡丹圖 (『村庵藁』上)

三郎偏愛牡丹紅 粧與楊妃一樣同 爲報繁花春似夢 御屏應護晚來風 希世靈彦  
(三郎 偏愛す牡丹紅 粧は楊妃と一樣に同じ 報を爲す繁花 春は夢の似し 御屏 應に晩來の風より護るべし)

イ 明皇貴妃賞牡丹圖 (『村庵藁』上)

御愛牡丹春風加 沈香亭北飽繁華 似聞野鹿銜將去 可恨君王不護花 希世靈彦  
(牡丹を御愛し 春風加ふ 沈香亭北 繁華に飽く 野鹿 銜へて將に去らんとするを聞くが似く 恨むべし 君王 花を護らざるを)

ウ 扇面牡丹 (『補庵京華新集』)

誰家魏紫與姚紅 寫入美人紗扇中 妃子醉菟招髣髴 沈香亭下倚春風 橫川景三  
(誰が家にあらん魏紫と姚紅と 美人の紗扇中に寫し入る 妃子 醉菟して髣髴を招き

沈香亭下 春風に倚る)

エ 牡丹(『默雲藁』)

欲知春富貴 日暖牡丹開 花似沈香昔 人無白(傍注:李白)也才 龍澤天隱  
(春の富貴を知らんと欲し 日暖かく牡丹開く 花は沈香の昔の似くして 人に白やの才  
無きなり)

オ 李白醉像(『補庵京華新集』)

太白長庚定酒星 牡丹花下晝冥々 請君扶醉歸天上 直酌銀河酒面醒 横川景三  
(太白長庚 酒星を定む 牡丹の花下 晝冥々たり 君に請ふ 醉を扶して天上に歸する  
を 直だ銀河を酌みて面に洒ぎて醒まさん)

カ 李白扶醉圖(『村庵藁』中)

一醉長安眠酒家 扶來殿上日西斜 何爲白髮三千丈 無頼沈香亭畔花 希世靈彦  
(一醉して 長安酒家に眠る 殿上に扶け來たりて 日は西に斜めなり 何爲れぞ白髮  
三千丈 無頼なり沈香亭畔の花)

以上、唐玄宗、楊貴妃、更に李白が詠出された牡丹詩を取り上げた。この三人をつなげたのが「沈香亭」である。李白は沈香亭に呼びだされ、「清平調詞」三首を作ることを命じられた。その二首目には、「借問漢宮誰得似 可憐飛燕倚新粧(借問す 漢宮に誰か似るを得ん 可憐なる飛燕 新粧に倚る)」<sup>45</sup>とあり、楊貴妃を前漢成帝の寵愛を受けた美人趙飛燕と並び立つものだと詠んだが、高力士はこの二句を利用して、楊貴妃に「以飛燕指妃子、賤之甚矣(飛燕を以て妃子を指す、之を賤むこと甚だしきなり)」<sup>46</sup>と誣告したために、李白はついに宮中から追放されてしまった。宋代には、牡丹を詠むとともに、この故事の関連人物を詠出する詩も何首か見られるが、そこまで作例は多くない<sup>47</sup>。

上記の五山僧の詩は、ア、イ、ウ、カは、玄宗、貴妃の「沈香亭」牡丹鑑賞を詠出しているが、エ、オ、カは、牡丹と李白を関連づけて詠じている。その中で、希世靈彦の三首ア、イ、カに注目しよう。ア、イには玄宗は花を保護しなかった、すなわち楊貴妃は「馬嵬坡」において命を絶たれ、玄宗に守られなかった故事を詠出する一方、カにおいて李白は「沈香亭」の無頼の花、ここでは楊貴妃のことを指すが、その「無頼花」によって追放された李白の「秋浦歌」其の十五における「白髮三千丈」の句を詠出する点が眼目であり、作者の独自の鑑賞態度を見せている。

こうして、五山文学には、牡丹が「沈香亭」の花、玄宗、楊貴妃、さらに李白と関連する花として扱われ、三人の運命をつなげる牡丹を鑑賞しながら、五山僧はさまざまな典故をちりばめて、豊富な牡丹像を詠み出している。

### 3. 景徐周麟の牡丹詩

五山後期を代表する禅僧景徐周麟の別集『翰林葫蘆集』には詩、字説、道号などをはじめとする各種の漢詩文が収録されている。本節では、景徐周麟の作品については『翰林葫蘆集』の巻数のみを示す。景徐周麟の作品には、牡丹が多く登場し、『翰林葫蘆集』において「牡丹」が現れるのは66か所あり、そのうち29首が牡丹を主題としており、五山僧の中で、もっとも多く牡丹詩を詠じた。本節は、景徐周麟の牡丹詩から、とりわけ特徴的な内容の作品について検討する。

### 3.1 悟道の手段としての牡丹

景徐の牡丹詩への認識は、「次龍阜秀岳俊少春首韻」（第四巻）における句「唐人輕俗宋人奇、集在洛陽花下詩（唐人は輕俗にして 宋人は奇なり、集まりて洛陽に在り花下にて詩よむ）」からわかる。五山僧の中で、牡丹は洛陽の花であるという認識を共有し、唐の牡丹詩は「輕俗」であるのに対して、宋の牡丹詩は「奇」だと評価している。「畫題」（第四巻）では、「謂牡丹爲花者洛人也、謂海棠爲花者爲都人也。尊貴之也、蓋如本朝謂櫻爲花之類乎。（牡丹を謂ひて花と爲す者は洛（陽）人なり、海棠を謂ひて花と爲す者は（成）都の人なり。之を尊貴すればなり。蓋し本朝 櫻を謂ひて花と爲すの類か）」とあり、それぞれの都市・国で、花と指したときにどの花を指すのかについて述べる中で、牡丹を洛陽と結びつけている。前節でまとめたように、五山文学における牡丹詩は、宋代の牡丹詩に拠った作も多い。景徐が評価した「奇」は、歐陽修「洛陽牡丹記」の「美且異」における「異」と共通しており、それも五山文学において開花している。このような「奇異」な牡丹が詠まれたのが、次の一首である。

「雨後移牡丹芽 落竹髮」（第三巻）  
紅動牡丹風露芽 紅動く牡丹 風 芽を露はし  
雨餘移向野僧家 雨餘に移して野僧の家に向かふ  
南泉未必鐵腸漢 南泉 未だ必ずしも鐵腸漢ならず  
明日一株如夢花 明日の一株 夢の如き花ならん

この詩は文明 12 年（1480）の作品で、自らを「野僧」と称し、牡丹の芽を自らの住まいに移植する生活情趣を描いた。ここで眼目となっているのは転句と結句であり、『碧巖録』巻四にある「時人見此一株花、如夢相似（時人 此の一株を見るに 夢の如くに相似たり）」<sup>48</sup>に拠ったものである。『碧巖録』は宋代成立の禅宗の語録で、禅の語録や公案が百則記録されている。その中で、唐代池州の南泉禅師の関連した則が多数ある。当時、宣州の觀察使であった陸亘は、南泉禅師に参じ、晋代の僧、肇法師の『肇論』を閲覧した際、「奇特」だと思ったという二句がある。その「肇法師道、天地與我同根、萬物與我一體也。甚奇怪（肇法師道ふ、天地と我と同根にして、萬物と我と一體なり。甚だ奇怪なり）」という語に対して、南泉禅師は、庭前の花を指して、「時人見此一株花、如夢相似」と返した<sup>49</sup>。当則の本文には、肇法師は『莊子』を愛読し、さらに『維摩經』を読んだ際に、莊子の説は言い尽くしていないと感じて、『四論』を撰述し、「會萬物爲自己（萬物に會して自己を爲す）」と主張したとある。肇法師の語は禅僧に語り伝えられ、五山僧にも広く認識され、五山僧らの作品は、自然風物を鑑賞する際に、常に有限なものの中から無限なものを感じ取るような態度を共有している。例えば、虎関師鍊の「牡丹」（『翰林五鳳集』巻第八）詩「奇怪肇公花譜春、解言天地一根株、南泉擊節引柱醉、驚起夢中陸大夫（奇怪なり肇公 花は春を譜す、解きて言ふ 天地は一根の株、南泉 節を撃ちて柱を引きて酔ふ、驚き起る夢中の陸大夫）」も同じ公案を念頭にしつつ詠じたもので、結句は、同じく『碧巖録』巻四の百十二則に、「亦如人在夢、欲覺不覺、被人喚醒相似（亦た人の夢に在るが如く、覺めんと欲して覺めず、人に喚醒さるるに相似たり）」<sup>50</sup>という解釈があり、人生はそもそも夢のようであり、悟道は夢から目覚めることであるという仏教概念に拠ったものである。また、虎関師鍊のもう一首「牡丹」（『翰林五鳳集』巻第八）詩にも「天地同根且評後、遺芳千古競流傳（天地同根且し後に評すれば、千古に芳を遺して流傳を競はん）」の聯があり、牡丹には万物一体の思

想が託され、世人に覚悟を促す花と位置付けている。また、鉄山宗純の詩「炎天牡丹」(『金鉄集』)「牡丹當夏行春令、天地同根無正邪、熱殺南泉不許指、薰風六月一株花。(牡丹 夏に当たりて春令を行ひ、天地同根にして 正邪無し、熱殺する南泉 指さすを許さず、薰風六月 一株の花)」も挙げられるが、これも南泉の公案を詠出して「天地同根」であり「正邪」の分別がないと論じている。『莊子』齊物論第二には、「天地與我並生、萬物與我爲一(天地と我と並び生じ 萬物と我と一爲り)」<sup>51</sup>とあり、すべてのものが等しいという「齊物」を主旨としている。先述したように、肇法師は莊子の思想を更に深め、天地万物を自分という一に集合させるという禅の態度を述べ、それも禅僧らの悟道の最も大事な思想となっていた。これらの態度は、儒教では『孟子』で指摘された「具体而微」<sup>52</sup>と共通している。五山僧は、こういった儒釈道三教思想共通の万物一体論を意識しつつ、悟道を展開していると言えよう。景徐は、この「雨後移牡丹芽」詩において、自らの住まいに牡丹の芽を移植するような生活情趣と、明日の夢の花に参じるような心境を詠い、禅意豊富な語句により、独自の牡丹鑑賞態度を示している。特に、転句の「南泉未必鐵腸漢」は、南泉禅師が庭前の花を指しながら、「如夢相似」のような詩意がある言葉で仏理を説くような行為は、「鐵腸漢」(鉄のように固く、容易に動かさない人を指す)のように固く仏理を説くのではなく、むしろ景徐周麟など五山文学後期の作家らしい儒釈道三教思想とも見られる鑑賞態度と同じようなものであろう。

もう一首の景徐の詩「冬日牡丹」(第三卷)「氣候春耶冬日耶、恩風籠雨屬姚家、吾家曾種芭蕉樹、在地同根雪裏花(氣候は春か冬日か、恩風籠雨 姚家に屬す、吾家は曾て芭蕉樹を植ゑ、地に在りて根を同じくす雪裏の花)」にも、適度な風雨に恵まれ、冬から春の季節の変わり目において咲く牡丹を描き、かつて植えた芭蕉を連想して、牡丹も芭蕉も同根であるとする。

五山僧は宋以来の詩において理を論じる特徴を受け継ぎ、自然風物の描写とともに、禅理をも説き、梅や牡丹、芭蕉など花草、自然景観を眼前にししながら、何もかも同じ根を持っているという禅理を説いているのが共通の発想の仕方とされている<sup>53</sup>。景徐周麟のように、後期の禅僧において、牡丹の世俗的意味と仏教的意味を両方踏まえたうえで牡丹を読む禅僧は少なく、当時の世俗化の傾向が強い五山禅林において、特別な存在である。

景徐周麟の牡丹詩には、以上のような儒釈道思想による鑑賞態度が見られる。そして、その儒釈道思想とも関わるのか、白牡丹を詠じた詩が目立つ。次に景徐周麟の白牡丹詩について特徴を分析したい。

### 3.2 白牡丹

白牡丹は、他の色の牡丹に比べて珍重されなかったようである。唐代開元末の人裴士淹は、汾州(現在山西省隰県)の衆香寺において白牡丹一株を得て、長安の自宅に植え、天宝年間には「天下の奇賞」<sup>54</sup>となった。しかし、彼は「白牡丹」詩「長安年少惜春殘、爭認慈恩紫牡丹、別有玉盤乘露冷、無人就起月中看(長安の年少 春殘を惜しみ、争ひて認む 慈恩の紫牡丹、別に玉盤の露に乗じて冷たき有り、人の就ち起きて月中に看る無し)」<sup>55</sup>を残し、慈恩寺の紫の牡丹とは異なり、玉盤に冷たい露が載っているかのような月中の白牡丹を見る人がいないと嘆いている。また、中唐・白居易は、比較的早くかつ大いに白牡丹のイメージを詠んだ。その「白牡丹和錢學士作」において、「素華人不顧、亦占牡丹名……憐此皓然志、無人自芳馨、衆嫌我獨賞、移植在中庭(素華 人顧みず、亦た牡丹の名を占む……此の皓然たる志の、人無くして自

ら芳馨するを憐れむ、衆は嫌へども 我獨り賞し、移植して中庭に在り)」<sup>56</sup>と詠み、白牡丹を「素華（白い花）」と呼び、その世間から隔絶してひっそりと咲く皓然たる性格を詠み、超脱な人生態度を示している。

日本においても白牡丹は、孤高の存在としての立場を持っていた。その中で、景徐周麟は白牡丹をよく詠じ、五山文学において最も多く白牡丹を詠んでいる。その白牡丹詩の特徴を検討するために、まず一首を取り上げよう。

「便面 又」（第六卷）

洗空紅與紫 洗つひ空くす 紅と紫と

一朵月中看 一朵 月中に看る

更有花堪並 更に花の並ぶに堪ふる有り

能行白牡丹 能く行く白牡丹

便面に画かれた牡丹を詠じた作である。起句には、紅と紫を「洗空」（洗い尽くす）できる白牡丹のイメージを詠み出している。宋代蘇轍の孫である北宋・蘇籀（1091-1164）による「憶京雒木芍藥三絶」其の一「熟美酣馨迸佳瑞、暈稜紅碧化神工、根株肇自韓郎染、葩蘂人間一洗空（熟美 酣馨 佳瑞に迸り、暈稜の紅碧 神工に化す、根株 肇めて韓郎自り染まり、葩蘂 人間 一に洗つひ空くす）」<sup>57</sup>にもとづく。結句で、この奇異な花（葩蘂）が世間を「洗空」していると述べるが、その花は、転句に遡ると、2.1 で取り上げた「韓郎染根」の典故を用いている。前述したように、「韓郎染根」の逸話は蘇軾の詩ではじめて言及されたが、蘇籀は、蘇軾の句も念頭に起きつつ、世の中の汚れを洗い尽くすなど、独自の展開を見せている。また、蘇籀が詠む牡丹は、承句において「暈稜」（花卉の外輪）が紅や碧だとある。2.1 に挙げた『酉陽雜俎』における牡丹の花色の記載にも「色白紅歷緑」とあり、白牡丹は純白ではなく、花卉に紅や碧という色が暈ぼかし染めだされていたのだろう。また、転句の「韓郎染」について、『酉陽雜俎』には、韓愈には、仙術を身につけた韓愈の父方の姪が、小技として、「叔要此花青、紫、黄、赤、唯命也（叔 此の花青、紫、黄、赤を要むれば、唯だ命ぜよ）」と牡丹の花色を変えられるといい、そして、曲箔を立てて牡丹叢を遮り、「旦暮治其根（旦暮 其れ根を治め）」、その結果「牡丹本紫、及花、發色白紅歷緑（牡丹は本紫、花ひらくに及びて、色を發するに白紅に緑を歷る）」<sup>58</sup>とあり、牡丹の根元に薬剤を施して、多色化する作業を行っている。

希世靈彦の「白牡丹」（『村庵藁』上卷）詩「堂後新開氷玉姿、欲擬夜雨洗臙脂、豪家爭買紅兼紫、一種風流人不知（堂後 新たに氷玉の姿を開き、夜雨は臙脂を洗ふことを擬せんと欲す、豪家争ひて買ふ 紅と紫を兼ねるを、一種の風流 人は知らず）」では、起句も「韓愈外甥」逸話における「吏部後堂」（これは『酉陽雜俎』にはなく、『太平広記』所引『仙伝拾遺』にある牡丹の埋まる場所）を念頭に起きつつ、白牡丹の「氷玉」な姿を詠出している。五山文学では、「梅」のイメージとして「氷玉精神」<sup>59</sup>が広く認識されているが、ここでは、希世靈彦は白牡丹もその白さから、氷玉に比した。また、承句と転句では、世間の金持ちは、紅や紫の牡丹を好んで争って買い、白牡丹の風雅をわかっていないと指摘し、景徐の句と異曲同工であるが、景徐のほうが、簡易で読みやすい筆致でより洗練されたように見られる。

それに対して、景徐の承句は「一朵月中看」であり、白牡丹を月明かりの下に咲く花としている。五山文学における「梅」のイメージには、「氷玉精神」以外にも、「月精神」があり、それは北宋・林和靖の「山園小梅」詩における「暗香浮動月黄昏（暗香 浮動して月黄昏なり）」<sup>60</sup>句に基づく。

景徐の句でも「月精神」において、白牡丹が梅と同様に高潔な花であると主張しているのではないだろうか。

景徐は転句と結句において、白牡丹は月に並び立つことができると描き、白牡丹を月に比している。1で取り上げた舒元輿の「牡丹賦序」では、「赤者如日、白者如月（赤き者 日の如く、白き者 月の如し）」と、白牡丹は月のようであると書かれる。さらに、結句の「能行白牡丹」は『太平広記』二百五十六卷嘲諷「崔涯」（出『雲溪友議』）にみえる崔涯作の絶句の結句「一朶能行白牡丹（一朶能く行く白牡丹）」<sup>61</sup>によったものであり、月のように一輪の白牡丹が美しく咲き誇っている様子を描いている。

景徐周麟詩における白牡丹と月との関連をさらに検討するため、もう一首取り上げよう。

「秋日白牡丹 出秋涯集」（第五卷）

秋風問訊牡丹房 秋風 問訊す 牡丹房

却勝青春耀洛陽 却つて青春に勝り 洛陽を耀かす

今夜身遊月宮未 今夜 身 月宮に遊びしや未だしや

素娥低眉白霓裳 素娥の低眉 白き霓裳

詩題注には「出秋涯集」とある。『秋涯集』は、南宋・方岳の別集で「次韻梁倅秋日白牡丹」詩<sup>62</sup>が収録されている。景徐周麟の詩は、方岳の詩題を借りただけで、詩句や内容を利用せず、まったく違う秋の牡丹を描いている。特に、転句は、白牡丹を擬人化し、その「身遊月宮」を想像している。結句の「素娥低眉白霓裳」について、「素娥」は中国古代月宮にいる神女の嫦娥の別称である。道教では、嫦娥を月神と見なし、「月宮黃華素曜元精聖后太陰元君」などと呼ぶ。『文選』謝莊の「月賦」には、「引玄兔於帝臺、集素娥於後庭（玄兔を帝臺に引き、素娥を後庭に集む）」<sup>63</sup>の句があり、李周翰の注には「常娥竊藥奔月、因以爲名。月色白、故云素娥。（常娥は藥を竊みて月に奔り、因りて以て名を爲す。月は色白く、故に素娥と云ふ）」であり、古来月を「素娥」と詠む詩作が多い。「白霓裳」は『楚辭』九歌・東君における「青雲衣兮白霓裳」によるもので、本詩では、白牡丹は白い「霓裳」を着ている素娥に比されている。この詩において、景徐は白牡丹を擬人化したうえに、「身遊月宮」、「低眉」などの動詞表現によって動作の効果を加えて、白牡丹の動態的效果を呈している。

白牡丹の性格というと、先に言及した白居易は「白牡丹」詩で「白花冷澹無人愛、亦占芳名道牡丹（白花冷澹にして 人の愛する無し、亦た芳名を占めて牡丹と道ふ）」<sup>64</sup>と表現するように、白牡丹が牡丹であるのに世間に愛好されず冷遇されていることと、自身の冷遇されている状況を重ねて詠み上げている。また、新楽府「牡丹芳」では、当時長安の人々の牡丹鑑賞の熱狂ぶりを描き、「人心重華不重實（人心は華を重んじて實を重んぜず）」<sup>65</sup>という文飾が重んじられる世相を批判している。白牡丹は、世俗に愛好される紅や紫の牡丹と異なる超然たる態度がある一方、景徐周麟の詩においては、さらに白牡丹も梅の気質に近い「氷玉精神」、「月精神」があり、潔白、純粋な性格をも具有している。

池間里代子・中元雅昭氏は「白居易詠花詩における「白」の意味」<sup>66</sup>において、「白蓮」や「白牡丹」に感じる「清廉潔白」や「孤高不群」はその「中隱」思想に合致していると指摘した。景徐周麟の隱逸思想では、書の世界に身を隠そうとする「書隱」<sup>67</sup>がもっとも特徴的であり、白居易の「中隱」と同じように、俗塵を離れないまま心身の安泰を得る隱逸思想という点で一致する。景徐周麟は、高貴な出身もさることながら、官寺において重要な地位にありながら隱逸に憧れ、

よく「野僧」と自称し、詩文にも随所に隱逸志向が見られる。景徐周麟に白牡丹詩の作が集中するのも、白居易の「白」の性格と「中隱」思想の両方とを受容し融合させたからではないだろうか。

次に、景徐周麟の白牡丹詩で、詠史の要素が入るものを取り上げたい。

「秋日白牡丹 出秋涯集」(第五卷) 又  
牡丹門戸地無塵 牡丹の門戸 地に塵無く  
滿院秋光香露新 滿院の秋光 香露新し  
一朵長看天下白 一朵 長らく見る天下白  
吳王醉處夢中春 吳王の醉ふ處 夢中の春

起句は、白牡丹が塵一つない土地に咲く純潔な花であるとし、承句は「香露」の語を用いて、白牡丹の芳香を称える。白牡丹の香については、盛唐・王建「同與汝錫賞白牡丹」詩「曉日花初吐、春寒白未凝、月光裁不得、蘇合點難勝……(曉日花初めて吐き、春寒く白未だ凝らず、月光 裁つことを得ず、蘇合を點じて勝り難し……)」<sup>68</sup>や五代・殷文圭「趙侍郎看紅白牡丹因寄楊狀頭贊圖」詩において、紅牡丹と白牡丹をそれぞれ「紅艷裊煙疑欲語 素華映月祇聞香(紅艷 煙に裊やかに語るを欲せんと疑し 素華 月に映え 祇だ香を聞くのみ)」<sup>69</sup>などの前例がある。また、景徐は「和月嶺少年試筆韻」(第六卷)の句「白牡丹花我無夢 夜深祇道月猶香(白牡丹の花 我に夢無く 夜深く祇だ道ふ 月に猶ほ香ると)」でも、白牡丹が静寂で清澹な月あかりのもと、芳しい香りを放出している様相を描いている。

一方、転句と結句は、詠史に転じている。「天下白」は杜甫「壯遊」詩に「越女天下白、鑑湖五月涼(越女は天下に白く 鑑湖は五月に涼し)」<sup>70</sup>の聯があり、ここの「天下白」は越の美女西施を指し、杜甫はその至上の美貌を称賛する。「鑑湖」は長湖、慶湖とも呼ばれ、現在浙江省の紹興にあり、西施の出身地である。西施は越王勾踐から呉王夫差に差し出された美女で、勾踐は呉を破った後、西施を鑑湖に沈めたと伝えられている。杜甫は、この「壯遊」詩において、さまざまな歴史事件や人物を詠みあげ、栄華と没落を対照させ、歴史の無常を嘆く。景徐周麟の詩で、白牡丹を「天下白」の美貌を持つ西施に比した上で、呉王夫差を詠出するのは、杜甫の詩句を念頭においたものだろう。2.3で取り上げたように、五山文学における牡丹は、玄宗・楊貴妃・李白と結びつくことが大半で、このように西施と呉王夫差を取り上げるのは珍しい。呉王夫差が西施といた時を、虚無の夢だとし、人生も歴史も、何もかも夢のようであるという人生観を表している。

この他、景徐の「和清凉牡丹」(第四卷)「南唐宮殿老清凉、曾獻牡丹詩一章、後主花前纔悟道、瓣香換盡帳中香(南唐の宮殿 老清凉、曾て牡丹詩一章を獻ず、後主 花前に纔く道を悟り、瓣香 換へ盡す 帳中の香)」では、南宋・惠洪の詩話『冷齋夜話』に記されている法眼禪師が南唐の後主李煜のために牡丹詩を詠み、「髮從今日白 花是去年紅(髮は今日従り白く、花は是れ去年より紅し)」<sup>71</sup>などの比較句によって、人生の無常を悟らせる故事を引用して、牡丹詩を「清凉法語」(悟りの絶対の境地に至らせる仏教の教え)と同一視している。

景徐周麟の白牡丹詩は、五山文学において特筆すべき作品群であり、その詩群は、中国文学における典故や表現を多く受容した上で、高度な漢詩作成能力を示している。白牡丹を愛好する態度の背後には、世間から隔絶された隱逸への嗜好、詠史への転用による虚無・無常の人生観があるのだろう。

## おわりに

このように牡丹鑑賞とその詩詠は、中国から日本に伝わり、日本においても花開いた。とりわけ景徐周麟の牡丹詩は、作品数が多いのみならず、牡丹を借りて本人の世界観や人生観を表すのみならず、白牡丹を愛好し、熱心に詠みながら、特別な観念世界を表現したといえよう。

なお、本論文で、景徐周麟が白牡丹詩において歴史人物や事件の連想を借りて、独自の展開をする点について指摘したが、その他、漢高祖、唐玄宗、楊貴妃などと関連するような歴史故事の題材においても、景徐周麟は牡丹と絡めて詠じている。それらの詩は、五山文学としても景徐周麟の詩としても特筆すべきものであり、別稿で論じる予定である。

---

## 注

- 1 後水尾天皇(1611-1629 在位)の命を受けた南禅寺臨濟宗の僧崇伝(1569-1633)らが編集し、元和9年(1623)に成立した南北朝から江戸時代初期に至る五山禅僧の詩偈集である。本稿では、『翰林五鳳集』(大日本仏教全書、仏書刊行会、一九一四年)によった。『翰林五鳳集』および注28後掲の景徐周麟 『翰林葫蘆集』からの引用については、一部俗字を正字に改めた。
- 2 『竜城録』巻下、唐・柳宗元撰、尹占華、韓文奇校注『柳宗元集校注』(中華書局、二〇一三年)、三四四六頁。
- 3 唐・舒元興「牡丹賦序」、清・董誥等編『全唐文』(中華書局、一九八三年)、巻七、二七七四八五頁。
- 4 『松窓雜録』、羅寧点校『大唐伝載(外三種)』(中華書局、二〇一九年)所収、九二頁。
- 5 宋・樂史撰『楊太真外伝』、李劍国輯校『宋代伝奇集』(中華書局、二〇〇一年)所収、二五頁。
- 6 『楊太真外伝』「上皇既居南内、夜闌登勤政樓、憑欄南望、煙月滿目」、前掲5、三一頁。
- 7 五代・王仁裕撰、曹貽芬点校『開元天寶遺事』(中華書局、二〇〇六年)巻下「四香閣」、五八頁。
- 8 『楊太真外伝』、前掲5、二五頁。
- 9 『竜城録』巻下、「宋単父種牡丹」「洛人宋単父、善種牡丹、凡牡丹變易千種、紅白鬪色、人不能知其術、唐皇李隆基召至驪山、植牡丹萬本、色様各不同」前掲2、三四六五頁。
- 10 唐・舒元興「牡丹賦序」、前掲3、二七七四八五頁。
- 11 「賞牡丹」、唐・劉禹錫、陶敏、陶紅雨校注『劉禹錫全集編年校注』(岳麓書社、二〇〇三年)、四四四頁。
- 12 「清平調」、唐・李白著、清・王琦注『李太白全集』(中華書局、二〇一五年)、第一冊、巻之五、樂府四十四首、三六三頁。
- 13 「洛陽牡丹記」、李逸安点校『歐陽脩全集』(中華書局、二〇〇一年)第三冊、全集巻七十五・居士外集巻二十五、一一〇一頁。
- 14 「洛陽牡丹図」、前掲13、第一冊、全集巻二・居士集巻二、三四頁。
- 15 「洛陽牡丹記」、前掲13、第三冊、全集巻七十五・居士外集巻二十五、一〇九九頁。
- 16 「緑竹堂独飲」、前掲13、第三冊、全集巻五十一、居士外集巻一、七二三一七二四頁。

- 17 「洛陽牡丹記」、前掲 13、第三冊、全集卷七十五・居士外集卷二十五、一〇九九頁。
- 18 路成文「唐宋牡丹詩の主題嬗変」(『閩江文学』第一期、二〇〇九年六月)、一三九—一四三頁。
- 19 慶算(一二一三法印)撰『山水抄』、十三世紀に取りまとめられた作庭記という。
- 20 虎関師鍊『海蔵和尚紀年録』『続群書類従』卷第二百卅二第九輯下・伝部 卷第二百卅二、四六二頁。
- 21 唐・段成式撰、許逸民校箋『酉陽雜俎校箋』(中華書局、二〇一五年)卷十九・広動植四、一三八四—一三八五頁「韓愈侍郎有疏從子侄自江淮來、年甚少、韓令學院中子弟、子弟悉爲凌辱。韓知之、遂爲街西假僧院令讀書。經旬、寺主綱復訴其狂率、韓遂令歸、且責曰、市肆賤類營衣食、尚有一事長處。汝所爲如此、竟作何物。侄拜謝、徐曰、某有一藝、恨叔不知。因指階前牡丹曰、叔要此花青、紫、赤、唯命也。韓大奇之、遂給處須、試之。乃豎箔曲、盡遮牡丹叢、不令人窺。掘棵四面、深及其根、寬容人座。唯資紫輕粉朱紅、旦暮治其根。凡七日、乃填坑、白其叔曰、恨較遲一月。時冬初也、牡丹本紫、乃發花、色白紅歷綠、每朶有一聯詩、字色紫文明、乃是韓出宮時詩。一韻曰、雲橫秦嶺家何在、雪擁蘭關馬不前。十四字。韓大驚異。侄且辭歸江淮、竟不願仕。」
- 22 宋・蘇軾著、清・馮応榴輯注、黃任軻、朱懷春校点『蘇軾詩集合注』(上海古籍出版社、二〇〇一年)卷十一「和述古冬日牡丹四首」其の四「不分清霜入小園、故將詩律變寒暄、使君欲見藍關咏、更倩韓郎爲染根」、四九九頁。
- 23 「洛陽花木記」、清・陳夢雷編纂・蔣廷錫校訂『古今圖書集成』博物彙編・草木典(中華書局、巴蜀書社、一九八五年)第五十六冊、第二百八十七卷牡丹部、六七四五一頁。
- 24 「応製狀元紅」「蠻栗梢頭媚洛園、華篇應製動天門、金牋飛翰紅樓院、花爲新郎讓狀元」、前掲 1、『翰林五鳳集』卷第八、一九五頁。
- 25 朝倉尚「景徐周麟の文筆活動——延徳四年＝明応元年(4)」(『鈴峯女子短期大学人文社会科学集報』六十一、二〇一四年一二月)、二八頁。
- 26 『蔭涼軒日録』(大日本仏教全書、仏書刊行会、一九一二—一九一三年)文明 18 年 3 月 11 日条「……齋罷會於龍興軒、鹿苑院惟明。南禪蘭坡。天龍舜澤。勝定喬年。小補横川。靈松萱瑞。靈泉正宗。大昌天隱。大慈了菴。東堂九員。勝鬘桃源。雲居高先。等持春陽。一滴顯室。一睡壽春。宜竹景徐。寶篋泰甫。蔭涼某。西堂八員。其外平僧數十員。秉筆高秀峰少年。岱東雲。桂竺英。鶴九臯少年。殊勝岩。球廷章。玉如琢。琳潤英八人也。詩後有宴。一時快也。及晚醉歸……」、八二三頁。
- 27 『蔭涼軒日録』、八二五頁。
- 28 景徐周麟「城西尋紅千葉」「詩老三生長帽翁 寺前千衆照人紅 春風似惜歸時折 落日城西吹手巾」、「春雨城西小路斜 牡丹開處是君家 夜深千葉紅於午 一宿龍興古寺花」(上村觀光編、景徐周麟『翰林葫蘆集』、『五山文学全集』(第四冊、思文閣、一九九二年)、第五卷)。
- 29 「惜花」、前掲 22、卷十三、五九八頁。
- 30 玉村竹二著『五山禅僧伝記集成』(講談社、一九八三年)蘭坡景菴が江伯に寄した文に「桃花坊北有寺、與皇居相接、然而其地簫散、如在煙霞泉石之間……故江伯吾初月也、因作詩招之」「春色將塵風雨稠、牡丹院落暮生愁、檐聲未斷花移影、初月嬋娟半上樓」とある。
- 31 維馨は、維馨梵桂(1409-1491)のこと。室町時代臨濟宗の僧、寛正 3 年(1462)から三回相国寺就職を務め、別集に『東蘆吟稿』がある。景徐周麟と親交があった。

- 32 「先維馨大和尚、宴坐之軒、庭前有牡丹一叢」「此其平日接學徒所指示也、今春花盛開、虎嶽禪師招諸子弟俱觀之、因賦小詩賞之、是時禪師領真如之鈞帖、余聞之次韻、代疏致其賀雲 黃袈裟相半肩披 從此前程昇不遲 珍重牡丹屬先手 狀元紅亞月中枝」、『翰林葫蘆集』卷五。
- 33 中国古代では、八品、九品の官僚の服。ここでは、光甫成温の落髪で正式に仏門入りしたことを祝賀することを喩える。
- 34 宋・司馬光撰、李文沢、霞紹暉校点『司馬光集』（四川大学出版社、二〇一〇年）卷六五・序二、一三五四頁。
- 35 「正月牡丹」「洪鈞轉氣牡丹平、造化呈工占孟正、若論洛花先時節、少年司馬會耆英」前掲 1、卷第一・春部、九七頁。
- 36 『古宿新詩』（妙心寺雜華院渋谷厚氏所蔵）については、朝倉尚『禪林の文学 詩会とその周辺』（清文堂、二〇〇四年）において、『古宿新詩』の概要、作者、制作年代と配列基準についてまとめ、検討している。一二七—一八四頁。
- 37 前掲 36、一三一頁。
- 38 蘇軾「和述古冬日牡丹四首」「一朵妖紅翠欲流、春光回照雪霜羞、化工祇欲呈新巧、不放閑花得少休」、前掲 22、卷十一、四九八—四九九頁。
- 39 虎関師煉「牡丹」「曉秋移植晚春鮮 照曜魏家思昔年 梅落桃凋庭宇静 韶光欲滅一燈傳」、前掲 1、一九四頁。
- 40 『君台觀左右帳記』（国立国会図書館デジタルコレクション版 (ndl.go.jp) 写真 2021 年 12 月 20 日閲覧。
- 41 矢野環『君台觀左右帳記の総合研究—茶華香の原点：江戸初期柳營御物の決定』（勉誠出版、一九九九年）一七四—一七六頁、一八七頁。
- 42 「御物御画目録」東京国立博物館 画像検索 C0082289 御物御画目録 - 東京国立博物館 画像検索 (tnm.jp) 奥書「右目録者、從鹿園院殿已來御物御絵注文也、能阿弥撰之」。2021 年 12 月 20 日閲覧。
- 43 岩山泰三「五山詩における楊貴妃像—題画詩と後素集」（『国文学研究』一三一、二〇〇六年）、四七頁や小助川元太「『後素集』の『帝鑑図説』の利用—狩野一溪の画題理解に関する一考察」（『国語国文』七八・六、二〇〇九年）、一頁などでは、『後素集』と五山文学の関連が指摘されている。
- 44 宋・普濟著、蘇淵雷点校『五灯会元』（中華書局、一九八四年）卷第十二「谷隱聰禪師法嗣」「師曰、如何是夜半正明、天曉不露。隱曰、牡丹燈下睡猫兒。師愈疑駭」、七一八頁。
- 45 前掲 12、三六四頁。
- 46 前掲 5、二八頁。
- 47 宋・陳克「唐人画牡丹圖二首」其の二「殘紅通白及時開 不費君王羯鼓催 玉笛重拈天一笑 外邊蜂蝶等閑來」、許紅霞等編『全宋詩』（北京大学出版社、一九九九年）二五冊、卷一四七九、一六八九四頁など。
- 48 西谷啓治、柳田聖山編『禪家語録Ⅱ』（世界古典文学全集、筑摩書房、一九七二年）『碧巖録』卷四・第四十則、二四一頁。
- 49 『碧巖録』卷四・第四十則「陸互大夫久參南泉、尋常留心於理性中、游泳『肇論』。一日坐次、

- 遂拈此兩句、以爲奇特、問云「肇法師道『天地與我同根、萬物與我一體。』也甚奇怪。」肇法師、乃晉時高僧、與生、融、睿、同在羅什門下、謂之四哲。幼年好讀莊老、後因寫古『維摩經』、有悟處、方知莊老猶未盡善、故綜諸經、乃造『四論』。莊老意謂、天地形之大也、我形亦爾也、同生於虛無之中。莊生大意、只論齊物。肇公大意論性皆歸自己、不見他。『論』中道「夫至人空洞無象、而萬物無非我造、會萬物為自己者、其唯聖人乎。」雖有神、有人、有賢、有聖各別、而皆同一性一體。」
- 50 『碧巖錄』卷四・第四十則「陸互大夫恁麼問、奇則甚奇、只是不出教意。若道教意是極則、世尊何故更拈花、祖師更西來作麼。南泉答處、用衲僧巴鼻、與他拈出痛處、破他窠窟、遂指庭前花、召大夫云「時人見此一株花、如夢相似。」如引人向萬丈懸崖上打一推、令他命斷。爾若不平地上推倒、彌勒佛下生、也只不解命斷。亦如人在夢、欲覺不覺、被人喚醒相似。南泉若是眼目不正、必定被他搽糊將去。看他恁麼說話、也不妨難會。若是眼目定動、活底聞得、如醍醐上味、若是死底聞得、翻成毒藥。」
- 51 清・郭慶藩撰、王孝魚點校『莊子集釋』（中華書局、一九八二年）第一冊、內篇齊物論第二、七九頁。
- 52 『孟子』公孫丑上「子夏、子遊、子張皆有聖人之一體、冉牛、閔子、顏淵、則具体而微。」焦循撰、沈文倬點校『孟子正義』（中華書局、一九八七年）上冊、卷六、二一四頁。
- 53 中川徳之助「五山文学の世界」（『大東急記念文庫公開講演録 五山の学芸』、財団法人大東記念文庫、一九八五年）主に四七一五四頁において、五山禅僧の世界観「天地同根、万物一体」について論じている。
- 54 『酉陽雜俎』「開元末、裴士淹爲郎官、奉使幽冀回、至汾州衆香寺、得白牡丹一窠、植於長安私第。天寶中、爲都下奇賞。當時名士、有「裴給事宅看牡丹」詩」、前掲 21、一三八三—一三八四頁。
- 55 裴士淹「白牡丹」『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）卷一百二十四、一二三二頁。
- 56 白居易「白牡丹和錢學士作」謝思煒撰『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年）第一冊・卷一、諷諭一、七二—七三頁。
- 57 蘇籀「憶京雒木芍藥三絶」其の一、前掲 47、一七六四卷、蘇籀三、一九六三八頁。
- 58 『酉陽雜俎』、前掲 21、一三八四頁。
- 59 中川徳之助『日本中世禅林文学論攷』（清文堂、一九九九年）、十頁。
- 60 林逋「山園小梅」前掲 47、第二冊、一二一七—一二一八頁。
- 61 北宋・李昉等編『太平広記』（中華書局、一九六一年）卷二百五十六「崔涯」条、一九九四頁。
- 62 南宋・方岳「次韻梁倅秋日白牡丹」「自掩窗紗護夕陽、碧壺深貯溜晴光、可曾見此春風面、淨洗鉛華試曉霜」、前掲 47、卷三一九五、方岳六、三八二九三—三八二九四頁。
- 63 梁・蕭統編、唐・呂延濟等五臣注『文選』（據宋紹興辛巳（一一六一）建陽陳八郎崇化書坊刊本影印、国立中央図書館、一九八一）上、卷十三、三七三頁。
- 64 白居易「白牡丹」前掲 56、第二冊、卷十五、一二〇〇頁。
- 65 白居易「牡丹芳」前掲 56、第一冊、卷四、三七九頁。
- 66 池間里代子・中元雅昭「白居易詠花詩における「白」の意味」（『流通経済大学論集』四五、四、二〇一一年）、四七頁。
- 67 拙稿「景徐周麟隱逸思想研究」（『中韓研究学刊』総第十五輯、二〇一四年）一九五一

二〇六頁において、景徐周麟の隠逸思想を考察し、その「心隠」の志向、「書隠」の人生、平明閑逸な詩風を考察した。

68 「同與汝錫賞白牡丹」唐・王建著『王建詩集』（中華書局、一九五九年）、三九頁。

69 殷文圭「趙侍郎看紅白牡丹因寄楊狀頭贊圖」、前掲 55、卷七〇七、八一三六頁。

70 「壯遊」唐・杜甫著、謝思煒校注『杜甫集校注』（上海古籍出版社、二〇一五年）杜工部集卷第六、九三一—九三二頁。

71 南宋・惠洪『冷齋夜話』（中華書局、一九八八年）、卷一、一七—一八頁。「李後主亡国偈」「宋太祖將問罪江南、李後主用謀臣計、欲拒王師。法眼禪師觀牡丹於大内、因作偈諷之曰、擁毳對芳叢、由来趣不同。髮從今日白、花似去年紅。艷曳隨朝露、馨香逐晚風。何須待零落、然後始知空。後主不省、王師旋渡江。」